ヨーロッパの公園と地域共同体
－「市民的公共性」成長のための一提言－

Parks and communities in European civilization
A proposal for the growth of “citizens’ publicity” in Japan.

桑　野　　聡※
Satoshi KUWANO

Based on the “region seen in European parks” conducted in “Regional Culture Theory II”, we will examine the role that the park has for the maintenance and development of our local community with the history of European parks as a clue. It is possible to confirm various aspects of civil society, such as public sphere ideas typified by “Market square” of medieval city and the development of idea of landscape accompanying enlightenmentism.

はじめに

30年前、ベルリン留学中の私は、日曜日を宿舎近くの公園で過ごすことが多かった。天気のいい休日の昼に芝生に寝そべったり、園内のカフェで休息しながら課題に取り組むことは気持ちのいい思い出である[1]。ところが、帰国後の日本では滅多に公園を利用することがなくなった。その後、子を持つ親となって改めて公園を訪れる機会が増えたが、ヨーロッパのように様々な年齢層の人々が思い思いに公園を利用する姿は日本ではあまり見受けられない気がする。この印象の違いは何故なのだろうか、という素朴な疑問が今回の小論の出発点である。

「公園」とは、「公衆のために設けた庭園、または遊園地[2]」あるいは「公衆が憩いまたは遊びを楽しむために公開された場所（区域）。従って公共性の高い団体・組織によって供され運営されることが多い[3]」などと説明される。更に都市計画学や造園学などの分野で専門用語として使われる「公園」は、「緑地の一形態である。 公園は公衆の利用を前提とする土地であるが、用地を確保し、施設整備を行う営造物公園と、地域を指定して規制により質的な維持を行う地域制公園に大別される[4]」とある。また日本語としての「公園」は、英語の「パブリック・ガーデン」（Public garden）、あるいは「パブリック・パーク」（Public park）の訳語で、1870（明治３）年頃から用いられていることが確認できる[5]。

言葉の意味から考えるとヨーロッパの公園とは、まず王侯貴族の占有物であった城館・宮殿

※　文化学科

に付属する「庭園」(garden) や「狩猟場」(park) だったものが近代化の過程 (17 ～ 19世紀) で公衆に開放されたものと言える。また更に、日欧都市文化研究者の白幡洋三郎は「しかし本来公園とは、役所が管理する場所であったり、樹木や草花がうわっていることが必須の条件ではなかった。したがって、公園発祥の地である西洋では、植物が一本もみのらない石畳の広場も公園として機能している。公園とは人が寄り集まり、自由に入れる空間、誰かの独占になっていない空間、そんな程度の定義があっているように思われる」と述べている[6]。つまり「公園」とは、「近代市民社会における公共空間 (public space)」と考えることができる。

こうした理解を踏まえて、本論はヨーロッパにおける公園の歴史と社会的機能を幾つかの具体的なヨーロッパの公園の事例で確認することによって、私たちの近代市民社会における公園の意味を再考したい。以下では、公園を①「広場」としての伝統、②近代の都市計画に伴う空間創出、③歴史的遺産の保存・継承、④自然公園 (地域制公園) の４つの視点から考察する。

１「広場」としての伝統

多くのヨーロッパ都市には、その中心に「市場広場」(ドイツ語：マルクト広場Marktplatz) と呼ばれる市民の共有空間が存在している。上述のように、ヨーロッパにおいて広場は公園の重要な構成要素の一つと言える。

地域共同体に不可欠な生活空間としての「広場」は、気候的に一年を通して屋外が快適な地中海世界に発祥し、既に古代にギリシアのアゴラやローマのフォールムを確認できるが、アルプス以北のヨーロッパでは中世都市の発達に伴ってフランドル地方や北ドイツで発展した。これに対してフランスやイングランドでは広場の建設はずっと未発達であったと指摘される[7]。

近代市民社会の形成過程で「市民」の原型とされたのは中世都市で成長した市民層の自立意識である。この中世都市の広場は、市場の開催場所として経済的な役割を果たすと共に、裁判や住民集会、祝祭と儀礼の場としてさまざまに使われた。こうした機能と伝統は、近代化の歴史を経て地域共同体の維持・発展に大きく寄与することとなった。

例えば、ハンザ都市として繁栄したブレーメンのマルクト広場を見てみよう[8]。まず広場の北側にはゴシック様式の市庁舎が現存する。この市庁舎の地下にはヨーロッパ最大級の地下食堂 (ラーツケラー) があり、ハンザ都市を運営する各種ギルド会員たちの宴会場として利用された。そして広場の一角にはローラン像が立っている (資料１)。これは中世都市の自治を象徴するもので、多くの都市に存在した[9]。広場は現在も地域共同体の心臓部として機能している。

その他、南ドイツの帝国都市ニュルンベルクの広場は、現在ヨーロッパで最も美しいクリスマス市として人気である[10]。更に国王選挙の開催地として特別な地位を確立したフランクフルト・アム・マインのマルクト広場は、隣接する「レーマー」と呼ばれる市庁舎と共に18世紀に

至るまで国王選出の祝賀会場となった（資料２）。また1848年の革命の際には市民の自由主義運動の舞台となり、激しい市街戦が展開された[11]。そして、1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される東欧の民主化運動の展開の際にも、広場は重要な役割を果たした。ライプツィヒで行われた「月曜集会」の舞台の一つも広場だった[12]。

資料１　ブレーメンのマルクト広場（入江和夫『ハンザの興亡ー北ヨーロッパ中世都市物語』日経BP社　1997年、57頁）

資料２　ヨーゼフ２世の国王戴冠式で賑わうレーマー広場（作者不詳　1764年、ウィーン美術史美術館蔵）（「レーマー　皇帝の間」ドイツ語版パンフレットより引用）

フランドル地方の例としてブルージュの市庁舎前広場は典型的な美しい四角形をしており、広場を取り巻く中世ゴシック風の建物とカフェが立ち並ぶ[13]。広場中央の記念碑は、ヤン・ブライデルとピーター・デ・コーニンクという1302年の「金拍車の戦い」でフランス騎士を撃退した市民軍の指導者である。19世紀には多くの国家的・国民的記念碑が建設されたが、都市の広場はこうした歴史を代弁する役割も担っていた。

またローマ時代からの伝統の残るイタリアでも中世都市が新たな姿で誕生し、中世後期にコムーネ（都市共和国）体制へと移行していく中で大小の諸都市が特色ある広場を発展させた。例えばシエナのカンポ広場は、放射状に整備された美しい形態が際立つ。聖母を祝う祭の際に年２回（夏）行われる競馬（パーリオ）は、この広場の外周を使って行われる[14]。

２　近代の都市計画に伴う空間創出

軍事的・経済的な諸事情から中世都市の多くが中世後期から近世に要塞都市化することとなる。生活空間が制限されていた中世都市では居住空間の確保が深刻な問題であり、住居の高層化や空き地の占有、居住橋の発達などが近代とは異なる都市景観を作り上げていた[15]。しかしルネサンス～バロック期に街並みや景観に対する美的要求が明確となると、道路の整備や美化

の動きはその後の都市計画にも少なからず影響を与えることとなった[16]。

中世都市に起源をもつ市壁と濠の跡地を公園として利用する例は多い。前述のブレーメンの場合はヴェーザー川の両岸に広がった旧市街区を取り囲む防御施設が1802～1809年に撤去され、その地割をほぼ原形のままに残して公園が建設された（資料３）[17]。これと前後して王侯貴族は旧市街区と郊外の宮殿を繋ぐ道路の整備を行い、庭園や並木道の建設も進んだ。18世紀後半以降に市壁の撤去と濠の埋め立てが本格的にはじまり、各地で中世都市・要塞都市の変貌が進む。パリのオスマンの大改造[18]やウィーンのリング通り（シュトラーセ）の建設は、この典型例である。

ウィーンは19世紀半ばに市壁と稜堡・濠が撤去され、資料４のように環状道路と帯状の広大な空き地が誕生した。そこには新王宮と博物館や劇場など多くの文化的公共施設が建設されたが、美しい庭園からなる市民公園も作られた。このリング通りの散策とカフェの賑わいは多くの文学作品に取り上げられ、世紀末ウィーンの文化活動に欠かせない役割を果たした[19]。

資料３　ブレーメンの市壁跡「ブレーマー・ヴァルアンラーゲン」（Bremer Wallanlagen）の風車
（2009年５月撮影：桑野）

資料４　ウィーン都市改造後の＜リング・シュトラーセ＞沿いの公共建造物
（註19　平田『輪舞の都ウィーン』88頁）

産業革命後のヨーロッパ諸都市では市民の要望を踏まえて新しい都市計画に基づく市街区建設が進められ、計画的な緑地帯の設置や保護が行われた[20]。そして、そこにはこの時期に特徴的な余暇やレジャーの誕生と連動した新しい街づくりの痕跡を見出すことができる[21]。例えば、万国博覧会の開催は19世紀後半を特徴づける現象であるが、会期終了後の会場の多くがより進化した公園へと生まれ変わった。例えば、ロンドン西部ウェストミュンスター地区に広がる鹿猟園は1630年代から開放されてきたが、1851年の第１回万国博覧会の会場となった。このハイド・パークは現在まで労働者の集会からロックコンサートまでさまざまな活動の場となっており、公園の北東隅にあるスピーカーズ・コーナーは市民の言論の自由を象徴する場所として有名である[22]。

またウィーンのプラーター公園も万博会場に利用された一つである。ハプスブルク家の狩猟

場だったドナウ川沿いの広大な敷地を1766年に初めて一般公開した皇帝ヨーゼフ２世は、彼の理想とする理性によって治められる福祉国家の実現のために、これを実行したと伝えられる[23]。1873年に開催された万国博覧会の名残が見られる公園には美しい庭園と遊園地が広がり、有名な大観覧車をはじめとして小説や映画の舞台として知られている（資料５）[24]。

18～19世紀のロンドンには既に多数の遊園施設（プレジャー・ガーデンズ）が存在したが、1662年に開園したテムズ川南岸ランベス地区のヴォクソール・ガーデンズは、1859年に閉園するまで多くの市民が音楽や食事を楽しんだ（資料６）[25]。また1843年に開園したデンマークの首都コペンハーゲンのチボリ公園も、こうした進化型公園の一つと言えるだろう。当時のオリエンタリズムを背景に東洋趣味の建造物が建てられるなど、ユニークな遊園施設も加わり、今日では市民ばかりか世界的な観光地となっている[26]。

資料５　作者不詳＜プラーターの賑わい＞（加藤雅彦『図説ハプスブルク帝国』河出書房新社　1995年、102頁）

資料６　W.S.ミューラー作＜ヴォクソール・ガーデンズの大歩道＞銅版画　1759年（註25『ロンドン歴史地図』142頁）

更に都市部における公園の計画的配置には、19世紀末のイギリスのガーデンシティ構想にはじまるグリーンベルト（緑地帯）の発想や防災のための着想も影響を与えている[27]。20世紀の二度の世界大戦は航空機の導入に伴う空襲を想定した防災体制の必要性ももたらした。旧市街地の狭い街路の拡幅や延焼を食い止めるための空地の設置は不可欠なものとなったのである。2011年の東日本大震災をはじめとする大規模地震や火山噴火、近年ヨーロッパをたびたび襲う水害など、さまざまな自然災害に対する準備としての防災公園の役割も増大している。

３　歴史的遺産の保存・継承（史跡公園）

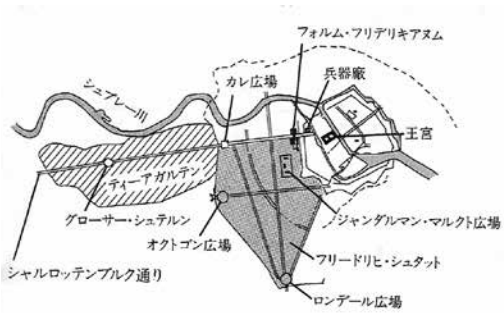
前述のように、公園の系譜として王侯貴族の宮殿や庭園が開放されて公園となっている事例は多い。パリ郊外のヴェルサイユ宮殿、ベルリンに隣接するポツダムのサン・スーシ宮殿、ウィーン郊外のシェーンブルン宮殿など、バロック・ロココ時代の大規模宮殿と大庭園の公園

は枚挙にいとまがない。これらの多くがユネスコの世界遺産や様々なレベルの文化財として保護されている。また旧市街の宮殿に通じる庭園がプロムナード（遊歩道）として整備された事例も多い。このプロムナードも公園の重要な構成要素の一つである。18～19世紀の上流階級とブルジョアジーたちにとって健康と身分にふさわしい習慣として散歩・散策は重視された[28]。

狩猟場（park）の公園化の事例は既述したが、代表例はパリ西部のブローニュの森であろう。18世紀中頃には既に多くの散策者を集めていたブローニュは、19世紀になると当時人気の温室の植物園をはじめ、博物館・遊園地・庭園・競馬場などをもつ多彩な施設を備えた森林公園へと変貌した。とりわけ1857年に始まるロンシャン競馬場の賑わいは有名である[29]。

近世における王侯貴族の宮殿や庭園の整備が都市景観に与えた影響には大きなものがある。例えば、13世紀にシュプレー川の中州の双子都市として登場したベルリンの発展も、現在の大聖堂付近から西に広がる一帯（ルストガルテン）は城館と庭園の建設によるものだった。また有名な並木道ウンター・デン・リンデンも1647年にベルリンの西部に位置するティーアガルテンの狩猟場に延ばされた道がはじまりだった（資料７・８）。東西対立時代に境界となったブランデンブルク門の西に広がるこのティーアガルテンは、冷戦期の東西ベルリンにおいて緩衝地帯の役割を果たしたが、既に19世紀に帝都となり産業革命の中でメトロポリスに発展したベルリンの中心部に広大な緑地帯（公園）を保持する結果となった[30]。

資料７　シュトリットベック＜初期のウンター・デン・リンデン通りの菩提樹並木道）1690年（杉本俊多『ベルリン－都市は進化する』講談社現代新書　1993年、99頁）



資料８　J.F.シュナイダーのベルリン都市図（1802）からの抜粋図（資料７に同じ、124頁）

また広場において既述したが、歴史的・文化的価値を備えた場所としてこうした場所には記念碑が造営され、それがまた歴史情報を発信する役割を担うことによって公園の社会的機能を増幅させることとなった。その場所と深く結びついた偉人の銅像や顕彰碑が設置され、時には公園の名称とされた。また戦争の犠牲者を追悼する慰霊碑が建立されることも多い。ドイツの場合ならば、ナポレオンの支配からの解放戦争の記憶や第一次・第二次世界大戦の戦没者、ユダヤ人迫害の記録、社会主義運動の記録などを各地で見ることができる。東西冷戦時代のベル

リンの壁を残す記念公園も存在する。こうして公園は、地域共同体にとって「記憶の場」としての機能を持つようになっている[31]。

４　自然公園（地域制公園）

都市空間に位置付けられるものが公園だったとすると、19世紀にこの定義を越える新しい公園が誕生する。それが自然公園であり、産業革命に伴う自然破壊やロマン主義の影響から生まれたものと言える[32]。例えば、現在ドイツには国土の25%以上にあたる100以上の自然公園が設定されているが、この自然公園について本論ではあまり言及することができない[33]。

他方、自然保護から一歩踏み出して、地域環境と人間の文化的営みを総合的に理解することで自然・地域と人間の共生を目指すジオパークの活動が注目される。「持続可能な開発」を模索することで地域共同体の振興に繋げようとするこの試みは、ツーリズム運動と連動してヨーロッパでも積極的に取り組まれている[34]。ユネスコ世界ジオパークは2015年秋から始まった新しいプログラムで、現在世界35か国、127か所が指定されている。

また史跡保存と連動して街並みや地域の生態系を保護・保存しようとするエコミュージアムという発想もヨーロッパでは普及している。中世都市の景観や遺跡保護の目的などから、ヨーロッパでは早期に建物や一定地域の景観に対する規制が作られている[35]。これは街自体が博物館となる試みとして注目されてきた[36]。公園は、こうした多面的な構想の中で都市の景観を繋ぎとめる重要な役割を担っていると言える。

おわりに

本論の冒頭で述べたように、ヨーロッパの公園とは「近代市民社会における公共空間」である。ヨーロッパ諸都市の多くの広場は現在も市民生活の中心であり、市壁撤去後の空地利用に建設された公園は往時の都市形態を今に伝えると共に、その後の都市計画における公園緑地の配置に大きな影響を与えた。王侯貴族の庭園や狩猟場にはじまる大規模公園は、近代化と共に拡大した都市領域の中に包摂され、市民の憩いの場から歴史的名所として観光地となり、新しいエネルギーを地域共同体に注入している。また環境保護の思想とその必要性は都市景観だけでなく、地域共同体の生活環境の保護とも結びついて市民生活の未来像に光を与えている。つまり、公園は都市と市民に不可欠なものとなり、社会学者J.ハーバーマスが指摘した18世紀に明瞭となる市民的公共圏を象徴する都市に欠かせないアイテムの一つとなっている[37]。

それ故、ヨーロッパの公園は近代化の担い手となる中産階級（ブルジョアジー）の文化を鮮明に発信する場となった。この時期に新たに生まれた「余暇」という時間を過ごす場所として公園は、劇場や博物館などと共にその地域における近代市民社会の成長を示すバロメーターと

して注目される。啓蒙主義時代から市民革命と産業革命の進展したこの時期、当時の人々のさまざまな活動が公園の発展と密接な関係をもつこととなった。敬虔な信徒たちの信仰グループ、読書会、サイクリングの流行やさまざまなスポーツクラブの活動、更にはカフェやサロンに至るさまざまな集いが、こうした市民の公共空間を必要とした。近年の歴史学研究もこうしたソシアビリテ論やアソシエイション研究の分野で多くの成果を上げている[38]。

他方、日本の公園は寺社の境内や行楽地の伝統と明治以降の西洋化が結びついて作り出された産物だが、この150年余の歴史の中でヨーロッパの公園とは異なる独自の発展・変容を遂げてきた。第二次世界大戦後の高度経済成長期には、画一的な小規模公園が日本各地に多数誕生した。更にオリンピックや万国博覧会などの大規模イベントを契機に大型公園の整備や複合文化・体育施設としての総合公園の建設も進んだ。これは一面でヨーロッパ諸国がかつて目指したフォルクス・パルク（Volkspark）の思想と接点を持っているとも言える[39]。

しかし、冒頭で述べたような日本とヨーロッパにおける公園利用のイメージの違いは何故だろうか。公園利用の実態はそう変わらないとも言われるが、日本とヨーロッパの市民的公共性・公共圏に対する考え方の違いに理由のひとつがあるように思われる[40]。それは生活スタイルに反映し、公共空間である「公園」を市民が利用することを当然とするヨーロッパとは異なり、日本人は公園を使うために「子ども連れ」や「健康づくり」などの大義名分を必要とする傾向を持っている。日本では桜が咲けば公園でお花見をするのが当然のように、私たちが日常的に公園を「利用していい」ことに気付くことは大切である。見方を変えれば、公園を使うことが日本人の「シチズン・シップ」の成長に繋がっていくのかもしれない[41]。そのためには従来の地縁や血縁関係に依拠した狭い地域共同体だけでなく、例えば趣味のネットワークやSNSの利用などによって形成される新しい形の地域共同体の発達が期待される[42]。都市計画の中で公園は地域を繋ぎ止める重要な結節点としての役割が期待されてくる。これからの公園は、「公共空間」として旧来の広場が持っていた機能を基礎としながら、更に新しい諸要素と結びつくことで地域共同体を再生させ、発展させるポテンシャルを備えているように思われる[43]。

1　筆者が通ったベルリン・パンコウ地区の市民公園の近況については、シュリットディトリッヒ・桃子「ドイツの子育て・教育事情－ベルリンの場合　第17回　自然豊かな公園」（2016年４月８日掲載）http://www.blog.crn.or.jp/report/09/207.html（2017年９月28日閲覧）

2　『広辞苑』第２版　岩波書店　1969年　728頁。

3　Wikipedia　「公園」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%AC%E5%9C%92（2017年５月９日閲覧）

4　同上。また専門用語としての公園については、関口鉄太郎「都市公園」（同編著『設計・施工　造園技術』養賢堂　1967年）311～457頁参照。

5　白幡洋三郎「日本文化としてみた公園の歴史」(共著『日本文化としての公園』八坂書房　1993年) 64～65頁。また、門井昭夫『ロンドンの公園と庭園』小学館　2008年、20～36頁参照。

6　白幡洋三郎、前掲「日本文化としてみた公園の歴史」３頁。

7　高山博・池上俊一「序文　宮廷と広場－出逢いと創造のトポス」(高山博・池上俊一　編『宮廷と広場』　刀水書房　2002年) 12頁。

アゴラについては、R.E.ウィッチャリー／小林文次　訳『ギリシャ都市はどうつくられたか』みすず書房　1962年、58～92頁。フォールムについては、ピエール・グリマル／北野徹　訳『ローマの古代都市』白水社＜文庫クセジュ＞　1995年、など参照。また広場についての総合的な研究として、ポール・ズッカー／大石敏雄・加藤晃規・三浦金作　訳『都市と広場－アゴラからヴィレッジ・グリーンまで』鹿島出版会　1975年、がある。

イングランドの市場広場については、W.G.ホスキンズ/柴田忠作 訳『景観の歴史学』東海大学出版会　2008年、とりわけ313 ～ 321頁参照。

8　瀬原義生『ヨーロッパ中世都市の起源』未来社　1993年、537～542頁。また沖島博美『北ドイツ海の街の物語』東京書籍　2001年、22～41頁参照。

9　地方都市に残るローラン像の例としては、塚本晶子『がんばれ、ブランデンブルク州－“あなたの知らないドイツ”への誘い』作品社　2007年、126～127頁参照。

10　瀬原義生『ドイツ中世都市の歴史的展開』未来社　1998年、69～73頁・563～594頁参照。

11　小倉欣一「フランクフルト・アム・マイン－国王選定とブックフェアの町」(比較都市史研究会編『比較都市史の旅－時間・空間・生活』原書房　1993年) 161～189頁、小倉欣一・大澤武男『都市フランクフルトの歴史－カール大帝から1200年』中公新書　1994年、小倉欣一『ドイツ中世都市の自由と平和－フランクフルトの歴史から』勁草書房　2007年、参照。

12　ライプツィヒの「月曜デモ」については、星乃治彦『東ドイツの興亡』青木書店　1991年、123～148頁、浅岡泰子『ライプツィヒ－あるドイツ市民都市の肖像』鳥影社　2006年。

13　瀬原義生、前掲『ヨーロッパ中世都市の起源』243～246頁。

14　池上俊一「中世都市と広場－シエナのカンポ広場を中心に」(前掲『宮廷と広場』所収) 231～251頁、同『シエナ－夢見るゴシック都市』中公新書　2001年、特に53～67頁参照。

イタリアの広場については、芦原義信『街並みの美学』岩波書店　1990年、75～85頁参照。

15　中世都市の景観については、K.グルーバー／宮本正行　訳『図説　ドイツの都市造形史』西村書店　1999年、永松栄『ドイツ中世の都市造形－現代に生きる都市空間探訪』彰国社　1996年、芦原義信、前掲書と同『続・街並みの美学』岩波書店　1990年。また居住橋については、桑野聡「ヨーロッパ中世都市における「橋」－「リビング・ブリッジ　居住橋」展に寄せて」(『比較都市史研究』第19巻第１号　2000年) 45～64頁参照。

16　田口晃『西欧都市の政治史』放送大学　教育振興会　1997年、67～68頁・86～91以下。

17　飯沼二郎・白幡洋三郎「対談　日本文化としての公園」(共著『日本文化としての公園』八坂書房 1993年) 76～79頁。公園施設は、1805年頃から造営が始まったブレーメン最古の公園であると共に、住民の要望で実現したドイツ最古の公共庭園施設とされる。

18　松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』日本経済評論社　1997年、特にパリの公園事情については220～234頁参照。また、宇田英男『誰がパリをつくったか』朝日新聞社　1994年、石井洋二郎『パリ－都市の記憶を探る』ちくま新書　1997年、など参照。

19　増谷英樹『ウィーン都市地図の歴史－15世紀～19世紀』柏書房　1999年、同『歴史のなかのウィーン－都市とユダヤと女たち』日本エディタースクール出版部　1993年、同『図説　ウィーンの歴史』河出書房新社　2016年、山之内克子「都市ウィーンの近代化」（比較都市史研究会編『比較都市史の旅－時間・空間・生活』原書房　1993年）191～219頁、同『ウィーン－ブルジョアの時代から世紀末へ』講談社現代新書　1995年、平田達治『輪舞の都ウィーン－円型都市の歴史と文化』人文書院　1996年、上田浩二『ウィーン－「よそもの」がつくった都市』ちくま新書　1997年、など参照。

20　例えば、ロンドンの公園設置運動については、門井、前掲書40～44頁。

21　川北稔　編『「非労働時間」の生活史－英国風ライフ・スタイルの誕生』リブロポート　1992年、アラン・コルバン／渡辺響子　訳『レジャーの誕生』藤原書店　200年、など参照。

22　第１回万国博覧会とハイド・パークについては、杉村昌家『水晶宮物語－ロンドン万国博覧会1815』リブロポート　1986年、同『ロンドン万国博覧会と水晶宮』本の友社　1996年、門井、前掲書87～99頁参照。スピーカーズ・コーナーについては、門井、前掲書95～96頁。

23　リチャード・リケット／青山孝徳　訳『オーストリアの歴史』成文社　1995年、66頁。

24　プラーター公園については、註19に挙げた文献において詳しく扱われている。例えば、上田、前掲書183頁以下、特に大観覧車については平田、前掲書132頁以下参照。

25　ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』東京書籍　1997年、142～143頁。谷田博幸『ヴィクトリア朝百貨事典』河出書房新社　2001年、116～119頁「プレジャー・ガーデンズ」。

26　チボリ公園のエピソードについては、浅野良哉・三浦寛也　編著『今日のヨーロッパ－その表と裏』千城出版　1968年、第Ⅲ部第７章「チボリ公園夜の‘ゴーゴー’」244～246頁。

27　ウィリアム・アシュワース／下総薫　監訳『イギリス田園都市の社会史－近代都市計画の誕生』御茶の水書房，1987年参照。

28　19世紀当時の公共のプロムナードの役割は、健康や余暇の楽しみだけでなく、成長した上・中流市民の「自己顕示」と「社会的競争」にも大きな役割を果たした。米田清治「コークスのなかの祝祭都市　祝祭都市はすべて舞台」（前掲『「日労働時間」の生活史』）208～215頁。

29　松井道昭、前掲書220～234頁、A.コルバン、前掲書157～172頁、など参照。

30　本多俊多『ベルリン－都市は進化する』講談社現代新書　1993年、参照。

31　ナショナリズム時代の記念碑については、大原まゆみ『ドイツの国民記念碑　1813～1913年－解放戦争からドイツ帝国の終焉まで』東信堂　2003年参照。ドイツ東北部の地方都市ギュストロウの宮殿前広場の事例については、桑野聡「旧東ドイツ地域における中世都市の現在－2005年ドイツ現地調査報告」（『郡山女子大学紀要』第44集　2008年）23～28頁参照。

　ユダヤ人・東西ベルリン問題の記念碑については、三宅悟『私のベルリン巡り－権力者どもの夢の跡』中公新書　1993年、アンドレーア・シュタインガルト／谷口健治・南直人・北村昌史・進藤修一・為政雅代　訳『ベルリン－〈記憶の場所〉を辿る旅』昭和堂　2006年、参照。

32　田中俊徳「国立公園と国家アイデンティティー－イエローストーン国立公園誕生を例に」（『パブリック・ヒストリー』第６号　2009年）は、米の自然公園の誕生がヨーロッパ文明に対するコンプレックスやナショナリズム的運動と結びついていたことを指摘する。宇野佐「自然公園」（前掲、関口鉄太郎編著『造園技術』）458～496頁。

33　自然公園の現状と課題については、畠山武道・土屋俊幸・八巻一成『イギリス国立公園の現状と未来－進化する自然公園制度の確立に向けて』北海道大学出版会　2012年参照。

34　鈴江恵子『ドイツ・グリーン・ツーリズム考ー田園ビジネスを創出したダイナミズム』東京農大出版会　2008年、河本大地「海外のジオパークに学べること、日本から発信したいことーヨーロッパのジオパークにおける教育と地域連携を中心に 」(『地理』61－6　2016年)。

35　上田貴雪「ヨーロッパの景観規制制度－「景観緑三法」提出に関連して」(『国会図書館　調査と報告』第439号　2004年) では、英仏独伊の現在の景観規制制度が比較紹介されている。

36　種田明「都市と博物館、都市の博物館ーヨーロッパ文明の窓」(寺尾誠　編著『都市と文明』ミネルヴァ書房　1996年)、ヴェルナー・クノップ／宮崎浩子　訳「博物館都市ベルリン」(木村直司編『未来都市ベルリンーベルリン2000年のビジョン』東洋出版　1995年) 参照。

37　J.ハーバーマス／細谷貞雄・山田正行　訳『公共性の構造転換－市民社会の一カテゴリーについての探求　第２版』未来社　1994年、特に26～38頁。

38　二宮宏之『結びあうかたちーソシアビリテ論の射程』山川出版社　1995年、森村敏巳・山根徹也編『集いのかたちー歴史における人間関係』柏書房　2004年。またウルリヒ・イム・ホーフ／成瀬治　訳『啓蒙のヨーロッパ』平凡社　1998年、弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』＜世界史リブレット＞山川出版社　2004年、参照。

39　フォルクス・パルクについては、飯沼二郎・白幡洋三郎「対談　日本文化としての公園」(前掲『日本文化としての公園』) 105～123頁参照。

40　日本の公共意識の特色については、阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書　1994年、26～38頁、篠原一『市民の政治学－討議デモクラシーとは何か』岩波新書　2004年。

41　小野佐和子『こんな公園がほしいー住民がつくる公共空間』築地書館　1997年。

42　例えば、コミュニティガーデン活動が近年注目される。越川秀治『コミュニティガーデンー市民が進める緑のまちづくり』学芸出版社　2001年。ドイツではクラインガルテン運動として普及している。飯沼・白幡、前掲「対談　日本文化としての公園」121頁以下。

43　小谷元洋「街づくりの一環としての都市公園を考える」(『北陸経済研究』397号　2012年)、斯波照雄『西洋の都市と日本の都市どこが違うのかー比較都市史入門』学文社　2015年、などで扱われる現代の街づくりの問題にとっても新しい地域共同体の形成は必要である。また鳴海邦碩『都市の自由空間－道の生活史から』中公新書　1982年、が指摘する自由空間はそのために重要であり、本論が扱う「公園」にも当てはまると言えよう。

　地域の再生に公園が果たす具体例としては、春日井道彦『人と街を大切にするドイツのまちづくり』学芸出版社　1999年、所収の「道路地下化で川辺を取り戻すーデュッセルドルフのライン河岸プロムナード」43～55頁参照。

追記：本論は短期大学部文化学科開講「地域文化論Ⅱ」の授業で行ったヨーロッパの公園に関する講義 (2017年５月11日実施) を基に加筆・修正を加えたものである。授業実施後に野沢謙治教授より、飯沼二郎・白幡洋三郎『日本文化としての公園』(八坂書房　1993年) をご紹介いただいた。またもみじ会テーマとして卒研ゼミ毎のパネル制作を進めていく際に、卒業研究ゼミ生の木村美結・渡部真琴の両氏より本学図書館収蔵の門井昭夫『ロンドンの公園と庭園』(小学館　2008年) を教えてもらった。その他、多くの教員・学生たちからの示唆を受けてまとめることができた。末尾ながら謝辞に代えさせていただきたい。